

学園

だより

平成18年7月1日発行

財団法人

中国四国酪農大学校

電話 (0867) 66-3651

FAX (0867) 66-3652

E-mail jerko@mx4.et.tiki.ne.jp

http://ww4.et.tiki.ne.jp/~jerko/



第42期生 蒜山登山 中蒜山山頂にて

巻頭の言葉

校長 有富 敬典



卒業生の皆さんお元気ですか。
酪農大

校は、昨年度財団設立四十
の節目を迎え、これを記念し
て同窓会との共催により、記
念誌「四十年の歩み」の発刊
及び農林水産省中国四国農政
局斉藤次長さんをはじめとし
た多くの関係者による
記念植樹を行いました。

植樹したのは「こぶ
し」の木で、この「こ
ぶし」というのは「友
情」という意味があり、
また、桜より一足先に
花を咲かせることから
季節を教えてくれ、北
側の花びらが曲がって
付くことから包囲を教
えてくれるといわれ、
これからも本校を巣立
っていく若者に対し



第2牧場 タワーサイロの看板

「時」と「これから歩んで行
く道」を教えてくれるものと
思っており、大きく健やかに
育つてくれることを願ってお
ります。

今、国を挙げた行財政改革
が進められ、組織の統廃合あ
るいは民営化であるとか独立
行政法人化等が行われており
ますが、当酪農大校におい

ても例外でなく、借入金の計
画的な償還や県派遣職員の縮
減をはじめ、自主財源の確保
といったようなことが求めら
れております。

なかでも自主財源の確保に
ついては、授業料の他第一、
第二牧場で生産される生乳の
販売収入が主要財源である本
校において、全国的な生乳の
生産調整や牛乳消費の減退に
伴う乳価の低迷により非常に
厳しいものとなっております。

特に、第二牧場におけるジ
ャージーは、観光地「蒜山高
原」の象徴として、又、放牧
主体の飼養形態でカロチンを
多く含む生乳を生産し付加価
値の高いヨーグルトなど乳製
品を作る上では大きく貢献し
ていますが、乳価においてホ
ルスタインとほとんど差がな
いのが現状で、単に自主財源
の確保という点のみから考え
ると今後検討を要する大きな
課題であると思っております。

また、なかには「授業料の
大幅値上げにより自主財源を
確保すべし」との意見も耳に
しますが、「担い手の育成・
確保は農政の最重要課題」あ



本館前 記念植樹のこぶし

るいは「担い手なくして食糧
自給率の向上はあり得ない」
等の理由から、全国各都道府
県で設立、運営している農業
大学校の中には授業料を無償
としているところも少なく
なく、さらに、米や野菜、果樹と
いった農業を志せば授業料は
安く、酪農を志せば高いとい
うのは不公平であり、これ以上
の授業料引き上げは後継者・
担い手確保の観点からいかに
なものかと考えております。

次に、県派遣職員の縮減に
ついていですが、本校設立時
に二〇名余いた県派遣職員を
平成二十年度には五名に縮減
するといふもので、計画的に
異動のない財団職員への切り
替えを行っているところで、
現在、県派遣職員七名、財団職

員九名、計一六名で学校運営
に当たっております。「卒業
後、学校へ行っても知り合い
の先生がいない」という言葉
をよく耳にしておりましたが、
これからの卒業生に取りまし
てはそういったことは解消さ
れるものと思っております。

ここでいくつか酪農大校
の近況をお知らせしたいと思います。

まず第一牧場では、永年の
念願でありました搾乳牛舎が
六月末には完成予定で現在急
ピッチで工事が進んでいま
す。完成後は、多くの方々が
見学に来られても恥ずかしく
ないよう、周辺の環境整備も
行いたいと考えています。

第二牧場では、事務所前の
県道を挟んだ南側にありまし

た育成牛舎を撤去し、芝生広場や駐車場を備えた「ジャージーふれあい広場」として真庭市に整備していただくこととなっております、今年秋までには完成する予定です。

また、蒜山インターチェンジから直進して三木が原にいたる新しい道路が、現在「蒜山スカイライン（旧有料道路）」まで完成しておりますが、このスカイラインと交差する地点で視野がひらけて蒜山高原を一望でき、特に、第二牧場牛舎及びタワーサイロが目前に見える絶好の場所であることから、この牧場のシンボリック存在のタワーサイロを看板として活用し、蒜山高原を訪れる多くの観光客に対し酪農大学の存在を広くPRすることとしています。なお、この道路は、今年度中には第二牧場事務所前の県道と連結しメイン道路として完成する予定となっております。

第一、第二牧場とも、年々姿を変えつつありますので是非一度おいで下さり、その変化を含めて蒜山高原を楽しんでいただければ幸いです。

卒業生の皆さんへ

構元勝代

蒜山の山々も緑もゆる季節になり楽しい日々を送っています。

卒業生の皆さんも新鮮な気持ちでそれぞれの場所で活躍され、忙しい毎日を送っておられる事でしょう。私事です。が三月三十一日をもって退職いたしました。卒業生の皆さんには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

卒業生の皆さんは私にとって我が息子、娘の様に思っている一人が大切な人でした。時には大声で笑い時には怒る日々が懐かしく思い私の宝物として忘れる事は無いでしょう。

何事も諦めることなく、マインナスをプラスに考えて挑戦して下さい。そして今いる場所です。本当に必要とされる人に成長して下さい。

最後に健康第一、信頼第一で活躍される事を蒜山の大地よりお祈りいたします。皆さんの思い出ありがとうございます。

第40期生卒業証書授与式

理事長表彰 (特に学業品行優秀な者)

理事長表彰 優等賞 尾崎 直幸 (岡山県)

全国農業大学校協議会会長表彰 (特に成績優秀な者)

尾崎 直幸 (岡山県)

校長表彰

■ **優等賞** (学業品行優秀な者)

森山 夏季 (島根県) 和田 晃次 (山口県)

田中 公浩 (兵庫県)

■ **精勤賞** (遅刻欠席などが無く、精勤に学習した者)

尾崎 直幸 (岡山県) 林 優太 (大分県)

和田 晃次 (山口県)

■ **努力賞** (学業、学校生活にわたり努力が認められた者)

井上真梨子 (兵庫県) 中村 満洋 (熊本県)

寺本 優香 (島根県)

■ **就農激励賞** (卒業後直ちに就農し、今後その活躍が期待される者)

角藤 嘉樹 (愛媛県) 笹治 孝年 (岡山県)

直原 裕太 (岡山県) 田中あゆみ (宮崎県)

中村 満洋 (熊本県) 西塚 晃太 (宮城県)

兵頭 尚人 (愛媛県) 三角綱志郎 (宮崎県)

森原 亨 (山口県)

■ **卒業論文賞** (卒業論文が独自性に富み、優秀であった者)

寺本 優香 (島根県):

「妊娠期間について」

西塚 晃太 (宮城県):

「適度の敷き料によるコストの削減」

林 優太 (大分県):

「板を用いた盗食防止装置による盗食防止策」

森山 夏季 (島根県):

「乾乳期の乳房内注入剤投与による乳房炎予防について」

教務課
便い

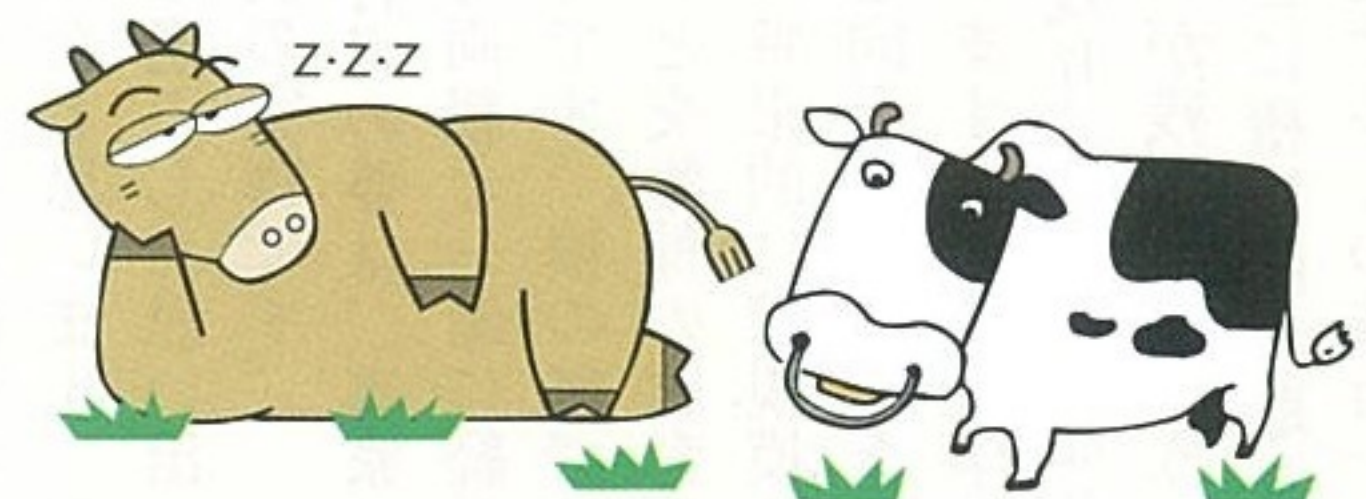
第42期生入学式

平成18年4月5日、第42期生26名 (p8) が入学しました。内訳は男子学生18名、女子学生8名です。内、後継者は13名です。

出身地で見ると、中国四国及び兵庫県が20名 (内11名が岡山県出身者)、その他の地域としては、遠く長崎、宮崎まで6名となっています。



第40期卒業生





牛飼いのよい仲間と共に

社団法人家畜改良事業団

岡山種雄牛センター

場長(第六期生) 和田 功

昨年、中国四国酪農大が創立四十周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

また、四十年という長い間築きあげられた伝統と実績はご指導をいただきました先生方のご尽力の賜でありまして心から敬意を表す次第であります。

昭和三十六年創立以来、現在に至るまで工業経済界ではどれだけの企業が雨後の筍のように現れては消えていったことでしょうか。この激動の時代に畜産業界も例外ではありません。

このような中、酪農後継者の育成大として多くの後継者、指導者を排出され創立四十年を迎えられたことに、改めて敬意を表すものでございます。

また、改良に携わる者として北海道をはじめ東北、関東、中国、四国、九州と全国の酪農家に訪問させていただいておりますが、酪農大の卒業と云うだけで、本当に快く受け入れていただきました。

重ねてお礼申し上げます。

昨年は、五年に一度の栃木全共の年で、前回の岡山全共同様に酪大の仲間が大活躍されたことがつい先日のように思い浮かびますが、少し振り返ってみれば、各地につくられた乳牛の改良一念に燃えた改良同志会に結集する各位の潜在意識の中に余りの南北戦争の混乱で牛群検定不要論が出始め、体型評価についても軽視する風潮を感じ、これからの乳牛改良はどうなるかという深刻な危機感が芽生えた時代だったように思います。



本校の授業で熱心に指導して下さる和田場長

「牛」をキーワードに東も西もなくみんな力を合わせて牛作りをやるうと純粋にして素朴な情熱の魂の同志が改良同志会をつくられ、その自主的な運営により各地での活発な運動を展開され大きな成果を上げ、早三十年の歳月が流れました。

中でも、全ホル、袋井の全国B&W、は卒業生の仲間が大きな華を添えていただきましたことが昨日のように思い出されます。

酪農界にあつて乳牛の改良は団体再編成と家畜排泄物処理対策が緊急の課題となっております。

しかしながら、一寸耳を澄ましてみると、今の時代が求めている物は「健康」です。

乳牛の改良に燃える各位には「人の健康は牛乳で、土壌の健康は糞尿で、それを生産する酪農の健康健全化は牛群検定をベイスとする牛作りで」をモットーに、時代の要請に胸を張って明るく誇り高く応えていただきたいと念じています。

岡山種雄牛センターは酪大OBが主力でとなっております。今後とも宜しく願っています。

【社団法人家畜改良事業団 岡山種雄牛センター在職員】

- 坂出 光夫 第六期生
- 和田 功 第六期生
- 赤木 正治 第七期生
- 細川 辰也 第七期生
- 笠尾 尚俊 第十期生

(旧姓・木梨)

- 川端 邦弘 第十五期生
- 藪内 藍 第三十七期生

二年生になつて

第四十一期生 水島佑太郎

酪農学校に入学して、早一年が経過しました。この一年はいろいろなことを学んでいる内に、あつという間に過ぎていったような気がします。僕がこの学校で一番強く学んだことは、畜産の楽しさと厳しさです。毎日、天候に左右されず行われる実習は、本当に大変でした。朝五時からの搾乳、大雨でずぶ濡れになりながらのパドックの除糞、炎天下の中での集草作業などいろいろな状況で実習をしました。中でも一番困ったのが、雪の降り積もる氷点下での搾乳です。マイナス七度を下回る気温の中で牛舎に行ってみるとウォーターカップの水がガチガチに凍っていて、まず水周りの解凍をしなければ搾乳をはじめることすら出来ませんでした。しかし、どの出来事もかけがえない貴重な体験になったと思います。実習のほかにも将来役立ちそうな講義や、様々な資格の取得など畜産に欠かすことのない知識や技術をたくさん学ぶことが出来ました。

また、一年間の寮生活、学校生活でかけがえないものを得ることが出来ました。それは、一人で落ち込んで悩んでいると



水島佑太郎さん

き、相談に乗ってくれたり、将来の夢を夜遅くまで語り合うこととの出来る友人です。時には意見が合わず、揉めそうになったこともありましたが、最後にはわかり合うことが出来ました。彼らと協力することのでつらい実習や、授業を乗り越えることが出来たのだと思います。そんなみんなと過ごした思い出の一つ一つが僕の宝物です。

僕の将来の夢は、実家の牧場を継いで両親と一緒に経営していくことです。僕の家ではホルスタインと交雑種の肥育を行っており、将来的には規模を拡大し肉質を向上させていきたいと思っています。酪農大での生活も残り一年弱となりました。悔いが残らないよういろいろなことに積極的に取り組み、出来るだけ多くの技術を身につけ、立派な牛飼いになれるように頑張りたいと思います。

私の夢

一頭の牛と出会って

第四十一期生 土師 真代

今、私の夢は牛飼いになって自分の牧場を作ることです。現在、私はこういう夢を持っていますが、これまでの私からは想像することさえ出来なかったことです。小学校の卒業文集などを見てみると「看護師になりたい」とか「イルカのトレーナーになりたい」とか書いていました。しかし、中学校の時、「ハービー」というドラマから盲導犬のことを知り、現在の日本では盲導犬を持ちたくても持てない現状を知り、盲導犬の訓練士になりたいと思うようになりました。その理由も単純で、動物が好きで、動物と一緒に働いて、人のためになりたいということでした。しかし、岡山県立高松農業高等学校の畜産科に進学し、私の夢は大きく変わりました。

二歳年上の姉が同じ学校の畜産科の大家畜を専攻していたこともあり、自然と牛舎へ足を向けていました。そこには三十頭のホルスタイン種の乳牛と三頭の黒毛和種が飼育されていました。私は三頭の黒毛和種の中にひときわ立派な角を持つ牛に目を奪われました。それが私と「鶴花」との出会いでした。

そしてそのころ、乳牛舎には間もなく分娩を迎えようとするホルスタイン種雌牛の「タカノウ ヒーエス ビバリー」が飼育されており、この母牛のお腹の中にいたのが、もう一頭の牛との出会いになる「テール」でした。この二頭の牛との出会いによって経済動物Ⅱ畜舎Ⅱ牛というものを知ることになりました。

まずはテールの生まれるころの話です。このテールの母牛、ビバリーは予定日を過ぎて一向に分娩の様子を見せませんでした。今まで牛のお産を目にしたことのない私には、どんな風になんか子牛が生まれるのだろうと期待に胸を膨らましていました。「ビバリー」は予定日を十二日過ぎた日、ようやく分娩しましたが、逆子であったため仮死状態で生まれてきました。先生は心肺蘇生を始めたがなかなか息を吹き返さず、先輩達と子牛を逆さ吊りにして飲み込んだ羊水を吐かせた結果、やっと呼吸を始めました。私は牛の分娩に初めて立会い、

おめでとう

驚きと懸命に助けようとする先生方や先輩の姿、そして懸命に生きようとする子牛の姿に感動し、「牛」というものに強く惹かれていきました。そしてこの誕生した子牛の成長も見てみたいと毎日牛舎へ通うようになりました。この子牛は尾が極端に短かったため「short tail」と通称「テール」と名付けられました。

そのころ、一頭の廃用牛の出荷に立ち会いました。しかし、私はなぜ生きていく牛を見捨ててしまうのか解らなくて溢れる涙を止めることができませんでした。ところが先輩達は涙を見せるどころか笑顔でその牛を見送っているのです。私はその姿にどうしてそんなお別れが出来るのか不思議で、先輩に尋ねると「牛は経済動物Ⅱ家畜というもので人が生きていくために乳や肉を生産する経済動物なんだ」と言われました。しかし、私には動物を殺すということが許せなかったので「どうして??」という気持ちがあり、先輩の言葉を素直に受け入れることが出来ませんでした。

この後もそんな気持ちを引きずったまま「鶴花」と「テール」の世話を始めとする牛舎での作業に明け暮れていました。臆病な性格で人間不信の「鶴花」を懐かせようとブラッシングをしていたある日、先生から「鶴花の本格的な肥育に入るぞ」と言われ、複雑な気持ちのまま「やるからには悔いの無いように」と自分に言い聞かせ頑張ろうと思うようになりました。

しかし、「鶴花」はずーと乳牛と一緒に飼われ、乳牛用の餌を与えられていたため、急に餌を変えてからは食べなくなったり、去勢肥育牛によく見られる病気で濃厚飼料の多給からくるリンとカルシウム量の不均衡やマグネシウム等の過剰摂取によって発生し、最悪の場合は膀胱破裂や尿毒症を引き起す尿石症になりました。そんな「鶴花」の看病をしている内に「鶴花」はブラッシングもさせてくれるようになり、私に心を開いてくれるようになりました。そして私の心の中はいつも「鶴花」のことでいっぱいでした。ついに友達からは「真代の彼は鶴花じゃ」とまで言われるまでになってしまいました。でも「鶴花」が愛しいと思う気持ちとは裏腹に私の気持ちはいつしか「鶴花」を立派な肥育牛に仕上げたいと思うようになっていました。牛を経済

動物として冷静に見ることが出来るようになっていました。そして二年生の夏に島根県の「かつべ種畜牧場」へ研修に行き牛について学び、より一層牛というものへ惹かれていきました。そして「鶴花」がお肉になってしまふのも後わずかになったころ、私の気持ちもすっきり落ち着き、少しでも「鶴花」との時間を大切にしたいと毎日朝早くから夜遅くまで一緒に過ごしました。しかし、牛を経済動物として見ることが出来るようになってきたとはいえ、今まで愛情込めて育ててきた「鶴花」がお肉になってしまふことを思うとこのまま時間が止まってしまえばいいのに時間が経つことをとても恨めしくも感じられました。しかし、友達か

オメデトウ

動物として冷静に見ることが出来るようになっていました。そして二年生の夏に島根県の「かつべ種畜牧場」へ研修に行き牛について学び、より一層牛というものへ惹かれていきました。そして「鶴花」がお肉になってしまふのも後わずかになったころ、私の気持ちもすっきり落ち着き、少しでも「鶴花」との時間を大切にしたいと毎日朝早くから夜遅くまで一緒に過ごしました。しかし、牛を経済動物として見ることが出来るようになってきたとはいえ、今まで愛情込めて育ててきた「鶴花」がお肉になってしまふことを思うとこのまま時間が止まってしまえばいいのに時間が経つことをとても恨めしくも感じられました。しかし、友達か

ヤンマー学生懸賞作文(銅賞)

3年連続入賞!!

第41期生、土師真代さんが書いた作文が、平成17年ヤンマー懸賞作文大賞で銅賞を授賞しました。昨年の40期生、田中あゆみさんと一昨年の38期生、砂田恵さんに引き続き3年連続の入賞となりました。土師さんの牛飼いに対する夢が若さあふれる文章で表現されています。授賞した作文は次のとおりです。
(全文掲載)

ら「鶴花」の担当が真代になって良かったと思うよ。もし、真代じゃなかったら今頃こんな立派な牛に仕上がっていただろうと思う」と。また「乳牛も和牛も私たちのために一生懸命働いて、最後には命までかけてくれる。そのことを考えたら食べ物大切に食わなくてはいけないと思っただけだった牛肉を食べるようになってきたんだよ」と言ってくれました。この言葉を聞いて、「鶴花」が立派に肥育牛として出荷される日には私の手で見送ってやろうと心に決めました。そして出荷の日には「鶴花」の前で涙を見せると「鶴花」がお肉になれないと思っていたので、「くっ」と涙をこらえて、彼を送り出してやりました。そして枝肉結果は

OMEDETOU

枝肉重量四三五kg、規格A4、BMS7という期待を上回る好成绩となりました。この結果を聞いて私は大きな達成感を感じたものでした。

また、乳牛の「テール」は「鶴花」に負けないくらい好きで思い出のある牛でした。初めて経験した牛の分娩で生まれた子牛だったので何か他の牛と違う感じでした。初めて見学した共進会で先輩達が颯爽と牛をリーディングしている姿を見て、私も早くテールを引きたいと強く感じたものでした。共進会の前には朝早くから登校し、牛を洗い、リーディングの練習を夜遅くまでやりました。リーディングは難しく「牛の欠点を見せないように美しく見せるもの」と先輩から聞き、牛の良さ悪さが解らない私にとって、「テール」を歩かせるということがどんなに難しいか思い知らされたものです。しかし、私にはどうしても共進会の会場を「テール」と歩きたいと言う気持ちが強く、先生や先輩から指導を受けながら必死に練習しました。その甲斐あって念願の「テール」のリードマンとして共進会へ出品することが出来ました。緊張して思うように歩かせることが出来ませんでした。初めての共進会で見事、首席を勝ち取ることが出来ました。私はこの大会を期に共進会の魅力に惹かれていきました。続く西日本B&Wショーでもチャンピオンを獲得することが出来ました。

しかし、喜びもつかの間、次の大会ではテールが初めて腰角と座骨のバランスが逆転しているという体の欠点を指摘され、三位という結果に終わってしまいました。私はすごく悔しい思いもしました。同時に共進会が開催される意味を理解するということを得るものもあつたのです。共進会は乳牛としての優れた特性を見極め、乳牛にとって大切な改良の度合いや比較を行うためにあるものだとわかりました。審査で指摘された欠点は次に種雄牛を選定するポイントになるのだと知り、ますます共進会というものが楽しくなってきました。次の大会は「テール」の分娩が近いため出場できませんでしたが、次回は経産牛としての部門へ出られるという新たな楽しみが出来ました。そして二〇〇四年四月二十九日「テール」は無事、子牛を出産し母牛となりました。「テール」が子牛の時からは側にいた私には「テール」が母親になったという実感はなかなかわきまありませんでしたが、搾乳し

おめでとう

ている姿を見て、改めて実感したものです。そして、次の大会は高校生活最後なので絶対「テール」と歩きたいと出場を目指して、体調管理や飼養管理、体洗いに精を尽しました。その甲斐あって出場を果たしましたが、最後から二番目という悔しい結果に終わりました。しかし、私には「テール」と再び出場出来たという何者にも勝る大きな喜びを得たのです。しかし、残念ながら私が卒業してからの「テール」は思うように受胎せず、現在では乳量も減少し、廃用・出荷をいつ迎えるかもわからない状況と聞いています。今、心から「ご苦労様、テール、今まで本当にありがとう」と声をかけてやりたいと思っています。

私は「テール」と「鶴花」の二頭の牛から多くのことを教えてもらいました。「テール」からは乳牛の改良の必要性、そして「生きる」と言うことです。「鶴花」からは「経済動物」というものに対する私の考え方を覚えてもらいました。「経済動物」。その言葉は人間が自分たちの生活のために作った都合の良い勝手な言葉だと思っていました。しかし「鶴花」と接する日々の中で、彼はその考えも振り払ってくれました。それどころか彼からは多くのすばらしいことを教えられました。物言わずモクモクと、しかも無邪気に私たち人間の食生活を豊かにするために尽くしてくれる経済動物のありがたさです。そして、この高校生活で何よりも強く感じたのは私をいつも暖かく見守り、アドバイスしてくれた友達の大切さです。私にとって、この二頭の牛との日々と友達はかけがえのない大切なものです。

今、私は牛飼いになる夢に向かって財団法人中国四国酪農高等学校で毎日、乳牛についての勉強をしたり、資格の取得に頑張っています。この学校でも多くの牛たちとの出会いと別れがあります。来年四月からは全国の農家に研修に出ることになっており、さらに幅広い経験が出来るものと今から楽しみにしています。

今まで経験した喜びと悲しみをいつまでも忘れずに、将来一つでも人の役に立てるよう、そして牛飼いになる夢に一步でも早く近づけるよう、これからも全力で新たな出来事に挑戦し、知識や技術を身につけていきたいと強く思っています。



新しい一年生二六名を

申し上げます。

迎え二ヶ月が過ぎました。この第一牧場便りを書いているのは初夏の訪れを感じる六月の始め、例年より若干遅めの一番草を収穫している最中ですが、卒業生の皆様にはお元気でご活躍のこととお喜び

第一にご報告させて頂くのは搾乳牛舎の改築についてです。第一牧場では、新牛舎の建設が急ピッチで進んでおり、建物自体はほぼ完成しました。皆さんもご存じのとおり現在の搾乳牛舎は、一部



中蒜山の頂から見た本校及び第1牧場

改築は行って来たものの本校開校時からの建物であり老朽化が目立ってきたり、牛床の短さが気になっていました。新牛舎は、旧牛舎の西側の一段高くなった以前のカーフハッチゾーンに建設中で、五〇頭を繋留する対尻式のタイストール牛舎で、レール移動式ユニット



建築中の第1牧場牛舎

を八台を使用した、パイプラインミルカーでの搾乳を予定しています。完成は平成十八年七月上旬の予定です
また、新牛舎のすぐ隣に貝殻等を利用した畜舎排水浄化システムの施設が完成しています。この施設の効果は①尿を容易に消臭することが出来る。②処理水や残渣は肥料として利用することが出来る。③使用済み貝殻は土壌改良材になる。④河川放流可能な水質まで浄化することが出来るといっ

飼養頭数

H18.4.1 現在

区 分	第1牧場	第2牧場
経産牛	40	101
育成子牛	38	60
乳用牛計	78	161
肥育牛	26	0
肉用牛計	26	0
合 計	104	161

たものです。本年度から新しくなるこの二つ施設については学生達も大いに興味を持っていて、卒業論文のテーマにしている学生も多く見られます。

乳用牛については、近年輸入精液を積極的に活用し牛群の改良を行ってきており、その産子の成績が出始めたところです。今後の乳質及び体型の向上に期待を高めています。共進会については、学生に積極的に取り組ませて

上位入賞を狙えるような牛作りを行っていききたいと思っています。

最後になりましたが、この牧場便りが卒業生の皆様の手に届く頃には新しい牛舎が完成していると思います。お近くにお寄りの際には本校に足を運んで頂ければ幸いです。

なお、平成十八年度の第一牧場は、中山場長、岡崎技師、樋口助手の三名で担当しておりますので、よろしくお願ひします。



上蒜山中腹から見た第2牧場

たジャージー牛たちは、それを楽しみにしていたかのように元気に放牧地へと飛び出し、まるで子供のように牧草地を駆けずり回っていました。さて、昨年は雨がなかなか降らず牧草の生育も今ひとつで、期待

していた程の収量が得られませんでした。また、大型の台風上陸の影響で飼料用トウモロコシが倒伏し、壊滅的な打撃を受けるなど、自家産粗飼料のやりくりが大変厳しい状況になっています。現在今年の一番草収穫がピークを迎えています。職員一同、今年こそはとばかりきって作業に当たっています。

春になって無事に新入生を迎え、また忙しい季節がやってきました。何かと教えていくのは大変ですが職員も学生に負けないように頑張っています。また第二牧場職員は昨年と大きく変わり、坂部吉彦前場長から山田徹夫場長となりました。磯田博、長綱則之の二名は去年とかわらず、これに教務課から異動してきた

また暑い夏がやってきましたが皆様はいかがお過ごしでしょうか。昨年度の冬は例年にならない大雪にみまわれ、大変厳しい寒さとなりました。第二牧場でも飼料タンクが大

雪の重みで倒壊するなど被害が出ましたが、幸い人畜共に怪我もなく乗り切ることが出来ました。その寒さのせいかな春の訪れが幾分遅く初放牧も、昨年に比べ一週間ほど遅くなりました。それでも約六ヶ月ぶりに放牧され

豪雪で倒壊した飼料タンク



豪雪で倒壊した飼料タンク

第二牧場だより



職員紹介

校長 有富 敬典
副校長 森本 博之 (教務課長兼務)

総務課

課長 片岡 秀人
主事 有富 英美

事務員

法花 千恵美

教務課

主任 西 淳子
技師 芦田 草太

技師

池田 良弘
調理員 谷口 育子

調理員

藤本 光子
北野 明起

経営課

課長 山田 徹夫 (第二牧場長兼務)

第一牧場

第一牧場長 中山 裕貴

技師

樋口 照夫
岡崎 奈々

技師

磯田 博
溝口 泰正

技師

長綱 則之
北野 紘平

〇印は内部異動者
◎印は新職員